

ニューディール体制とアメリカ知識人

河 内 信 幸*

New Deal Regime and the American Intellectuals

Nobuyuki KAWAUCHI*

はじめに

繁栄を謳歌した1920年代のアメリカ合衆国では、大量生産・大量販売のビジネス・システムとマス・メディアの発達消費ブームを引き起こし、国民の生活水準は著しく向上した。自動車、ラジオ、掃除機、洗濯機などの普及は目覚ましく、ジャズやチャールストンが流行し、映画館が賑わいを見せ、娯楽雑誌を手にする人々も増えた。ここに、アメリカの大衆文化は大きく花開いたのである。¹⁾

しかし、恐慌が1,200万人以上の失業者を生み出すほど深刻な事態になると、都会の街角では、パンとコーヒーの配給を受ける“ブレッド・ライン”，紙とブリキで作られた掘建て小屋“フーパー・ビル”，汚い身なりのりんご売り，貨物列車に無賃乗車する浮浪者などの光景が目立った。そのため、繁栄が作り出した大衆文化は急速に色あせていくように見えた。²⁾

それだけに、文化の牽引者とも言えるべき文学者・知識人・芸術家たちは、何らかの形で自己と社会との関わり方を考えざるを得なくなり、文化や芸術のあり方を問い返す社会意識をもち始めた。彼らの多くは、程度の差こそあれ、ソ連の社会主義建設という“偉大な実験”を意識しており、ソ連は彼らにとって「良心のモデル」（ルイス・フォイヤーの言葉）であった。確かに、20年代後半からアメリカでは一種の“ソ連ブーム”が起こっており、1926年から28年にかけてソ連の文学や詩が数多く翻訳刊行されたり、28年から30年には40本ものソ連映画が上映されたりしたのである。³⁾

1 恐慌と文学者

(1) “文学戦争”

1920年代のアメリカ文学の担い手は、第一次世界大戦に何らかの形で「参加」し、戦後にパリ亡命の“エグザイル”（国外亡命者）となった、いわゆる「失われた世代」（ロスト・ジェネレーション lost generation）の作家たちであった。既成の価値や理念に飽き足らない彼らは、ヨーロ

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

ッパでの生活体験を通して社会的な不条理を強く意識していた。そのため、恐慌が勃発すると、彼らは強烈な社会意識をもちながら文学作品を問い返し、モダニズムと社会参加の作家として「見いだされた世代」(ファウンド・ジェネレーション found generation) となったのであった。⁴⁾

当時の作家の多くは、ビッグ・ビジネスとモダン・アメリカに幻滅感を抱いていたが、その一方で1928年から始まったソ連の第一次5カ年計画に強くひかれていき、恐慌の勃発とともに「社会革命」への思いが募った。例えば、すでに『ニュー・マッシュズ』(*New Masses*) 誌に参加していたジョン・ドス・パソス(John Dos Passos)は、1927年にサッコ・バンゼッティ処刑反対デモに参加して投獄されたり、1928年にソ連を訪れたりした経験から、アメリカ共産党(Communist Party of the USA)へと次第に接近していった。またセオドア・ドライサー(Theodore Dreiser)も、27年のソ連訪問を契機に急速に社会主義へと傾倒し、世界の様々な問題を解決するには「共産主義」以外にないと決意するほどであった。⁵⁾

1934年3月には、シドニー・フック(Sidney Hook)、ジェームズ・バーナム(James Burnham)、V.F.カルヴァートン(V. F. Calverton)、ジェームズ・ローティ(James Rorty)などが「アメリカ知識人に対する公開状」を発表し、1935年6月の『ニュー・リパブリック』(*New Republic*) 誌には、「国民は、本質的に調整能力のない資本主義の混乱と悲惨な状態を耐え忍ぶか、さもなければ資本主義を廃して社会主義を実現するか、いずれかの道を選択しなければならない。もはや、両者の中間の可能性など全く存在しないのである」と述べたアppealが掲載された。当時の知識人や文学者のかなり多くは、マルクス主義を唯一の行動原理として信奉し、ソ連が人道的・民主的な国家として発展することに期待をかけたのである。⁶⁾

そして、恐慌が深刻になればなるほど、文学者たちはソ連社会の状況をアメリカ国内に投影させて見るようになり、「社会革命」の夢を大きく膨らませた。『ニュー・リパブリック』誌の準筆であったエドモンド・ウィルソン(Edmund Wilson)は、恐慌の社会不安を「最後の審判の前兆として大地の裂ける」思いで受け止め、1931年1月の同誌社説のなかで、「資本主義はすでにすべてのコースを走り終えた。我々は、別の理想を求めなければならない」と強調した。また『ニュー・マッシュズ』誌の主筆マイケル・ゴールド(Michael Gold)も、株価暴落の2カ月後には、コレクティヴィズム(集団主義)に基づく「社会革命」が必要であると訴えた。⁷⁾

1928年7月のコミンテルン第六回大会が「第三期論」(Third Period, 「戦争と革命」の時代)を提唱し、30年代の不況がアメリカ史上これまでにない深刻な様相を帯びてくると、社会意識を高揚させた文学者のあいだに、いわゆる「文学戦争」と呼ばれる論争が起こった。この「文学戦争」は、“プロレタリア的”であるべき文学作品のあり方と文学者の責任をめぐるものであり、次の2つの論争から象徴的に始まった。第一は、ソートン・ワイルダー(Thornton Wilder)とゴールドの間の論争であり、『ニュー・リパブリック』誌上で行われた。共産党員のゴールドは、すでに「プロレタリア・リアリズム」の文学形式を『ニュー・マッシュズ』誌上で提唱しており、ワイルダーを「上品ぶったブルジョアジーの詩人」と批判し、その作品には現実認識が欠如していると論評した。この論争は、多くの文学者の関心を呼んだため、1カ月半余りの間に多数の投書が『ニ

ュー・リパブリック』誌に寄せられた。⁸⁾

第二は、『ニュー・マッシュズ』誌派と『パーティザン・レビュー』(*Partisan Review*)誌派との対立であり、ジェームズ・T・ファレル(James T. Farrell)の文芸批評をきっかけに始まった。『ニュー・マッシュズ』誌派は、急進的政治評論と文学との融合を目的として、ジョン・リード・クラブ(John Reed Clubs)を株価暴落の直後にニューヨークで設立すると、このジョン・リード・クラブのニューヨーク支部機関誌として、1934年には文芸評論を中心テーマとして取り上げる『パーティザン・レビュー』誌がフィリップ・ラーヴ(Philip Rahv)とウィリアム・フィリップス(William Phillips)によって発行されたのであった。ところが、1934年9月にシカゴでジョン・リード・クラブの総会が開かれると、両誌は「プロレタリア文学」の方向をめぐって対立し、『パーティザン・レビュー』誌のほうが急進的な傾向を強めるようになった。そして、1935年にジョン・リード・クラブが解散されると、『パーティザン・レビュー』誌は、他の左翼雑誌と提携を深めたりして、青年 коммуニストの同人誌的な色彩を濃くするようになった。⁹⁾

両誌の論争は、「プロレタリア文学」のあり方から文学者・知識人の社会的責任にまで及ぶ幅広い問題を含んでいたが、その背後には、1935年の7月から8月にかけて開かれたコミンテルン第七回大会で「人民戦線」の方針が提起され、アメリカ共産党が路線を大きく転換したことと関係が深かった。そしてこの論争は、1937年6月の第二回全米作家会議以後になると、スターリニズム対トロツキズムというような、露骨な党派的・イデオロギー的対立に終始するようになった。¹⁰⁾

(2) ジョン・リード・クラブの解散

アメリカ共産党は、1929年から1931年にかけて労働者文化連盟を文化活動の中心に据えてきたが、30年に革命文学国際部会第二回世界大会（通称ハリコフ会議）がソ連で開かれると、共産党はこの連盟の1部局として革命的作家連盟(Revolutionary Writers Federation)を創設した。組織形態からすれば、ジョン・リード・クラブはこの作家連盟の1組織にすぎなかったが、1934年にはニューヨークを中心に1,200名を越える会員をもち、シカゴやボストンなどでも活動する共産党最大の指導機関となった。ニューヨーク支部は、組織的にはいくつかの部門に分かれて様々な政治的・文化的活動をしてきたが、ジョシュア・クーンニッツ(Joshua Kunitz)、ケセス・バーク(Kenneth Burke)、ホーレス・グレゴリー(Horace Gregory)、エドワード・ダールバーグ(Edward Dahlberg)などを講師にしたジョン・リード・クラブ作家学校(John Reed Club Writers' School)と、ロバート・マイナー(Robert Minor)、ヒューゴー・ゲラート(Hugo Gellert)、ウィリアム・グローパー(William Groper)、ラファエル・ソイヤー(Raphael Soyfer)などを教師陣にしたジョン・リード・クラブ美術学校(John Reed Club School of Art)などが中心であった。¹¹⁾

ジョン・リード・クラブは、それまで進歩的な知識人・文学者の参加を拒否してきたが、ハリコフ会議を契機にして次第に広範な労働者・知識人の結集を呼びかけるようになり、マイケル・

ゴールドも1931年から1932年にかけて『ニュー・マッシズ』誌のなかで文学者・知識人の幅広い結集を訴え続けた。¹²⁾そして同誌は、革命的作家連盟の提案に基づいて、1932年5月には“革命的作家”の団結と労働者との連帯を目指す綱領を作成するため、第一回ジョン・リード・クラブ全国代表者会議を招集し、全米13の支部から38名の代表が集まった。¹³⁾議長団のひとりジョセフ・フリーマン(Joseph Freeman)は、「ジョン・リード・クラブ宣言」を起草し、「腐敗した資本主義政府」を攻撃しながら「ブルジョア思想との決別」を訴えた。さらにその4カ月後には『ニュー・マッシズ』誌は、「なぜ私は共産主義者になったか」というシンポジウムの議論を発表し、文学者が左翼化する根拠を掲載して、文化活動の重要性を訴えた。こうして1933年末になると、「インテリ職業人を歓迎する」とアール・ブラウダー(Eral Browder)は述べ、これまで知識人を“不安定なプチ・ブル”“青白きインテリ”と呼んで軽蔑してきた共産党の姿勢に、変化の兆しが見え始めた。¹⁴⁾

そして1932年4月に、ソ連共産党中央委員会の決定によってソ連プロレタリア作家協会(通称ラップ)が解散し、全ソ作家連盟が結成されると、アメリカ共産党もそれに従い、ジョン・リード・クラブは1934年9月の総会で組織の解散を決め、グランビル・ヒックス(Granville Hicks)は、より広範な組織運動を目指して、1935年に全米作家会議を開催するという「呼びかけ」を発表した。¹⁵⁾これは、ラップにしてもジョン・リード・クラブにしても、それまでの狭い硬直した組織から脱皮して、戦争とファシズムの脅威と戦う幅広い文化集団にしなければならないという現実認識の表れであった。

(3) 全米作家会議

1935年4月、ニューヨークのメッカ聖堂で第一回全米作家会議(American Writers' Congress)が開かれ、200名余りの代表が参加した。この会議に参加したのは、『ニュー・マッシズ』誌のプロレタリア作家、共産党の知識人・文学者、急進化してきたリベラルな作家・批評家などであった。採択された決議文は、その冒頭で「資本主義制度はわれわれの眼前で急速に崩壊しつつある」と述べ、詩人・小説家・劇作家・評論家は「資本主義の滅亡と労働者政府の樹立」のために活動しなければならないと訴えた。¹⁶⁾

この第一回全米作家会議では、前衛文学運動の旗手であるウォルドー・フランク(Waldo Frank)が議長を務め、ブラウダー、ゴールド、フリーマン、ファレル、マルカム・カウリー(Malcolm Cowley)、ジャック・コンロイ(Jack Conroy)、ケネス・バーク(Kenneth Burke)、エドウィン・シーバー(Edwin Seaver)などが、文学と「革命」の関係や社会運動への参加について報告をおこなった。当時は、コミンテルン第七回大会で「人民戦線」が提起される3カ月余り前に当たっていたこともあり、会議に出席した作家の間にも様々な立場が表明されたが、ラディカルからリベラルまで幅広い文学者・知識人を結集して社会変革の影響力を強めなければならないという方向が示された。¹⁷⁾

なかでも注目されたのは、会議の決議文に「労働者」という言葉ではなく、「人民」という表現

を使用すべきであると主張したパークの姿勢であった。共産党員ではなかったパークは、階級意識に目覚めた労働者と連帯して文学者が社会行動するだけではなく、中産階級を含むもっと幅広い人々と共同戦線を組む必要があると強調したかった。結果的には、こうしたパークの主張は批判の矢面に立たされたが、ニューディール政策に対する国民の支持が拡大すればするほど、“革命的”な労働者と連帯して社会運動を高揚させることなど不可能であり、それでは文学者の社会的責任を果し得ないという現実認識をもっている作家も多かった。¹⁸⁾

そのためこの第一回全米作家会議は、解散したジョン・リード・クラブに代わって、フランクを会長とするアメリカ作家連盟 (League of American Writers) の結成を決め、「アメリカ全土の作家たちを、平和と民主主義に賛同し、ファシズムと反動に反対する全国的な文化的組織に統合する」（加入申請書）ことを提唱したのであった。つまり、アメリカ作家連盟は、中産階級の文学者の間にもできるだけ幅広く組織を拡大して、反ファシズムとソ連擁護を掲げる統一的な文化集団を結成することを目指したのである。¹⁹⁾

1937年6月に開かれた第二回全米作家会議は、コミンテルンの「人民戦線」の方針に沿ったものであり、350名余りの代表が参加した。この第二回全米作家会議では、『ニュー・リパブリック』誌が1936年1月にファシズムへの賛否を問いかけたことにも表れたように、ナチズムの脅威に対する危機感が全面に押し出され、「プロレタリア文学」の在り方を問う議論よりも、ファシズム反対と民主主義擁護の「人民戦線」が強く訴えられた。当時は、ヒットラー政権のラインラント進駐とスペイン内戦の勃発から、1年余りたっていた。²⁰⁾

短期間帰米中であったアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の参加がこの会議を大きく盛り上げ、かつて『ニュー・マッシュズ』誌上で「下劣なナチ」とまで非難されたこともあるアーチボルド・マクリーシュ (Archibald MacLeish) が議長を務め、アースキン・コールドウェル (Erskine Caldwell)、アプトン・シンクレア (Upton Sinclair)、ヴァン・ワイック・ブルックス (Van Wyck Brooks) などこの会議で重要な役割を果たした。フリーマンは、ヘミングウェイ自身の文学的出発点からスペイン内戦に傾倒する彼自身の姿勢が「人民戦線」そのものであると称賛したし、ファシストと非難されて前回不参加であったソートン・ワイルダーもこの会議には出席した。第一回全米作家会議当時、彼らは低い評価しかされてこなかったり、むしろ「反動的」・「ブルジョア的」というレッテルを張られてきた作家たちであった。反対に、第一回全米作家会議で議長役を果たしたフランクの姿が見えなかったことから分かるように、この頃にソ連で進行しつつあった「モスクワ裁判」と大粛正に批判的な文学者や知識人は、この第二回会議には出席できなかった。²¹⁾

第二回全米作家会議は、アメリカ的な価値や精神（アメリカニズム）を再評価することによって、リベラルからラディカルまでを「人民戦線」の旗の下に結集させようとした大会であった。そのためこの会議では、より幅広い文学者や知識人の団結を求める立場から、アメリカ作家連盟を全米各地に基盤をもつ組織に強化することが決定され、フランクに代わってハリウッドの喜劇作家ドナルド・O・スチュアート (Donald Ogden Stewart) を会長に選出した。²²⁾ しかし、第二回

全米作家会議とアメリカ作家連盟の方針に強く反発する人々も多く、ヒックスの主催する「専門委員会」などでは、「人民戦線」派とそれに反発するグループの間に激しい対立が見られ、3日目の各部門会議でも議事の進行がかなり混乱した。こうした混乱は、アメリカ社会の「偉大な伝統」と「人民戦線」の方針を直結させることに違和感を覚える人々があり、民主主義擁護の反ファシズム闘争を社会変革の理想的方針であるとするに彼らが反対したためであった。特に、『パーティザン・レビュー』誌の復刊に関わった文学者たちは、第二回全米作家会議と人民戦線運動の方針に激しく反対した。²³⁾

アメリカ作家連盟は、36年9月にスペイン内戦を報道するジャーナリズム批判を発表したり、38年5月に「スペイン戦争に関する作家へのアンケート」を実施したりして、文学者や知識人の間で確かにファシズムに対する危機感が高まったけれども、ジョン・チェンバレン(John Chamberlain)やアルフレッド・ビンガム(Alfred Bingham)などの中立的立場をとる人々は、スペイン戦争が民主主義を擁護する「われわれの戦争」であるとする第二回全米作家会議の方針に強い不信感をもった。それは、映画『スペインの大地』の現地ロケに関してドス・パソスとヘミングウェイが対立し、結局ドス・パソスは第二回全米作家会議に参加できなかったことに如実に表れていた。また、アメリカ作家連盟が1938年にローズヴェルト大統領を連盟の名誉会長に選出して、ローズヴェルト政権やニューディール政策を自らの文学運動と一体化させるようになると、文学者や知識人の間に論争と混乱がより深まった。²⁴⁾

すでに1936年4月に『パーティザン・レビュー』誌は、「アメリカニズムとは何か」と題するシンポジウムを行い、アメリカの伝統的価値と革命精神との関連について文学者や批評家に意見を求め、マルクス主義とアメリカニズムの連続性について議論が戦わされた。そこでは賛否両論が出され、ニュートン・アーヴィン(Newton Arvin)などはアメリカ民主主義の源流がトーマス・ペイン(Thomas Paine)にはじまる無階級社会の実現を求める思想にまでさかのぼることができる位置付け、それはマルクス主義的社会主義の思想と一致するものであると強調したが、反対の声も多かった。²⁵⁾たとえばジョージ・ノヴァック(George Novack)は、かつて革命闘争に背を向けたブチ・ブル作家と見なされた人々が今や人民戦線運動の文学的英雄と崇拝される時代になったと皮肉った。さらに、ラーヴは、1938年2月の『パーティザン・レビュー』誌上で「人民戦線」派グループの姿勢を批判して、彼らが「新しい唯物主義の赤旗をニューディール・マルクス主義の星条旗」に変質させてしまったと揶揄した。²⁶⁾

2 知識人・文学者の社会行動

(1) 社会党・共産党と1932年の大統領選挙

深刻な経済不安と「社会革命」への期待は、大統領選挙での社会党・共産党に対する支持となって表れ、ジョン・チェンバレン(John Chamberlain)は、32年9月の『ニュー・リパブリック』誌で、社会党候補のノーマン・トーマス(Norman Thomas)か、共産党候補のウィリアム・Z・フォスター(William Z. Foster)か、いずれかを選択することが重要であると呼びかけた。²⁷⁾ 社会

改革を目指すジョン・デューイ (John Dewey) やポール・H・ダグラス (Paul H. Douglas) らによって、1929年に結成された独立政治行動連盟 (League for Independent Political Action) は、7月にクリーブランドで開いた会議において、大統領候補としてトーマスの支持を決め、民主党の打倒と第三政党の結成を強調した。²⁸⁾

一方共産党に対する支持は、独立作家委員会 (Committee of Independent Writers)、および「フォスターとフォードのための専門家連盟」 (League of Professional Groups for Foster and Ford) として始まり、ドス・パソス、ウィルソン、ジョセフ・フリーマン (Joseph Freeman)、シャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson)、アースキン・コールドウェル (Erskine Caldwell)、シドニー・ハワード (Sidney Howard)、マルカム・カウリー (Malcolm Cowley)、シドニー・フック (Sidney Hook)、グランヴィル・ヒックス (Granville Hicks)、マシュー・ジョセフソン (Matthew Josephson)、ホーラス・グレゴリー (Horace Gregory)、ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes)、レオニー・アダムズ (Leonie Adams) などが参加した。この会議は、ジョセフ・フリーマンやマルカム・カウリーが指導して、1932年5月にニューヨークのウィルソンのアパートで開かれた。そこでは、ジェームズ・ローティ (James Rorty) とマシュー・ジョセフソン (Matthew Josephson) が大衆へのアピール案を起草し、共産党本部の修正意見を盛り込んで、作家・芸術家・知識人に対する「公開書簡」を作成した。こうして10月には、52名の知識人・文学者の署名からなる「文化と危機」 (Culture and Crisis) と題する声明が共産党との共闘という形で発表され、労働者階級に対する知識人の連帯と共産党候補に対する支持が呼びかけられた。ブラウダーは、「知識人の間に真の精神的革命が起こりつつある兆候である」と述べ、これを大歓迎した。²⁹⁾

（２）社共の対立と共産党の方針転換

しかし、社会意識を高揚させた文学者・知識人の期待に水を差すような衝撃的な事件も起こった。社会党は、オーストリアの社会民主党が指導する労働者のゼネストが弾圧されたことに抗議して、1934年2月16日にマディソン・スクエア・ガーデンで大衆集会を開いた。この時、共産党員が野次や怒号を浴びせかけたため、国際婦人服労働組合 (International Ladies' Garment Workers Union) 委員長のデイヴィッド・ドヴィンスキー (David Dubinsky) は演説を中止せざるを得なかった。そしてあげくの果てには、マイクをつかみ取る者や椅子を投げる者まで現れ、集会は社共対立から流血の惨事になってしまい、大量の警察官が動員される結果になった。この事件は知識人・文学者に激しい衝撃と幻滅を与え、ウィルソン、ドス・パソス、チェンバレン、ノヴァック、ライオネル・トリリング (Lionel Trilling)、エリオット・コーエン (Eliot Cohen)、フェリックス・モロー (Felix Morrow)、ジェームズ・ローティ (James Rorty)、クリフトン・ファディマン (Clifton Fadiman)、マイアー・シャピロ (Meyer Shapiro)、ロバート・M・ラヴェット (Robert Morss Lovett) など25名の知識人・文学者が共産党にたいして抗議文を送付し、1932年の大統領選挙などで社会党や共産党を支持してきた人々の中でも、政治意識を沈静化させてい

くものも現れた。³⁰⁾

ところが、この事件の後に共産党は、コミンテルン第七回大会の決定に従ってニューディールと大衆運動に対する方針を転換し、1935年7月4日付の『デーリー・ワーカー』(Daily Worker)には、「ソヴィエト・アメリカを目指して」という見出しのもとに、ジョージ・ワシントン(George Washington)の写真と独立宣言が掲載された。これは「共産主義」を「20世紀のアメリカニズム」とする方向の表れであり、共産党は、1936年の大統領選挙で共和党のアルフレッド・M・ランドン(Alfred M. Landon)を攻撃したため、結果的には「ローズヴェルト連合」(Roosevelt Coalition)の形成に貢献することになった。そして共産党は、1937年10月にローズヴェルト大統領がシカゴで「隔離演説」(Quarantine Speech)をおこなうと、これを高く評価して『デーリー・ワーカー』にしばしば大統領の写真に掲載し始めた。さらに、1938年5月の共産党第十回大会で「民主戦線」(Democratic Front)が提起され、「ニュー・ディール体制」への接近が図られたため、1939年になると共産党はローズヴェルト支持の姿勢を強めた。³¹⁾

(3) 社会運動への参加

繊維産業と石炭産業は、生産過剰と激烈な競争のために、「繁栄の20年代」にあってもその恩恵にあずかることができなかった分野であった。そのため、恐慌の深刻化が労使対立を深めて、過激なストライキ闘争が頻発した。

1929年のはじめ、ノースカロライナ州ガストニア郡で、紡績工場の激しいストライキが起こった。そして、共産党が全国繊維労働者組合(National Textile Workers Union)を組織して労働者の支援にのりだすと、重装備した会社の特別代理人と「100人委員会」と自称する自警団が「法と秩序」を守るために組織され、ストライキ参加者に激しい弾圧を加えた。この事態を憂慮したドライサー、ドス・パソス、フランク、ウィルソン、シャーウッド・アンダーソン(Sherwood Anderson)、アプトン・シンクレア(Upton Sinclair)などの人々は、1930年に共産党の支援のもとに南部政治犯救援緊急委員会を結成し、ガストニア・ストライキの調査を実施した。³²⁾

1931・32年には、ケンタッキー州ハーラン郡の瀝青炭産業の労働者が起こしたストライキを調査するため、ドライサー委員会が結成された。この委員会は特別作家委員会とも呼ばれ、ドライサーやドス・パソスのほか、10名余りの文学者・知識人によって結成され、共産党の政治犯救援委員会の下に設置されたものであった。特に1932年のドライサー委員会は、委員長ウォルドー・フランクを中心に強い社会的姿勢を示し、発表された報告書『ハーラン郡炭鉱労働者は語る』は、リベラルな文学者や知識人にもかなり影響を与えた。この時に同行したエドマンド・ウィルソンも、『ニュー・リパブリック』誌に「ケンタッキー・コール・タウン」や「階級闘争が存在する」などの記事を書いた。³³⁾

その後、全国産業復興法(National Industrial Recovery Act)に基づき瀝青炭公正取引コードが成立し、統一鉱山労働組合(United Mine Workers)と炭鉱資本の間でアパラチア協約が締結されたにもかかわらず、この協約に加わらなかったハーラン郡炭鉱資本は、労働者の市民的自由と団

結権・団体交渉権を蹂躪した。そして、ハーラン郡炭鉱経営者協会に対する国民世論の批判が強まったため、文学者や知識人もストライキを支援する姿勢を見せ、産業別組織委員会(Committee for Industrial Organization)の組織化にも寄与しながらかなり長い苦難をへた後に、1936年6月には上院教育・労働委員会でラフォレット市民的自由委員会(La Follette Civil Liberties Committee)が設置されることにもなった。

また、1931年1月に南部のアラバマ州で起こったスコッツボロー事件が、知識人の関心呼び、支援運動の輪が広がった。これは、9人の黒人少年が2人の白人少女をレイプしたというフレームアップ事件であり、最初被告の少年たちに死刑判決が下された。共産党の国際労働擁護同盟(International Labor Defense)は、『ネーション』(Nation)誌や『ニューヨーク・タイムズ』(New York Times)を通して幅広い救援運動を呼びかけ、ドライサー、ドス・パソス、シンクレア、リンカン・ステフェンズ(Lincoln Steffens)などの人々も抗議運動に立ちあがったため、全米黒人向上協会(National Association for Advancement of Colored People)やアメリカ市民的自由連盟(American Civil Liberties Union)などをはじめ、人権・福祉団体も次第に救済にのりだした。海外の知識人からも抗議と支援の声が寄せられ、ドイツではアルバート・アインシュタイン(Albert Einstein)やトーマス・マン(Thomas Mann)など300名にものぼる知識人が救援組織を結成し、イギリスでもH・G・ウェルズ(Herbert G. Wells)を先頭に33名の国会議員によって請願文が出された。こうして、世論の広がりにはサッコ・バンゼッティ事件に匹敵するものとなり、アメリカ・スコッツボロー委員会(American Scottsboro Committee)、スコッツボロー救援委員会(Scottsboro Defense Committee)などの組織も結成された。³⁴⁾

3 美術家の社会意識と組織化

(1) 社会意識の高揚とニューディール芸術計画

アメリカでは、20世紀初頭に庶民生活を題材にしたアシュキャン派のような絵画が生まれたけれども、概して美術家は文学者に比べて社会から隔絶された存在であった。しかも、感情抑制と勤労意欲を尊ぶヴィクトリアニズムの伝統もあって、国民自身も芸術からは疎遠であった。しかし、20年代の繁栄が大衆文化の花を開かせると、それまで“パリ巡礼”にでかけるのが常であった芸術家にも、アメリカ独自の文化を見直す姿勢が生まれた。そして恐慌の勃発は、ヨーロッパ偏重の芸術的伝統とヴィクトリアニズムを根底から揺るがし、自己表現の場を失った美術家は、生活苦から社会問題を意識せざるをえなくなった。³⁵⁾

こうして、社会的な矛盾や不条理を作品のモチーフにする美術家も多くなり、株価暴落の半年ほど前にパリから帰国したベン・シャーン(Ben Shahn)は、「サッコ・バンゼッティ・シリーズ」や「トム・ムーニー・事件シリーズ」を制作し、『ニュー・マッシズ』誌に政治漫画を描いたウィリアム・グロッパー(William Gropper)は、ジョン・スタインベック(John Steinbeck)が『怒りの葡萄』で対象にした季節労働者の姿を「移住」で表現した。³⁶⁾

美術家の社会意識は、ニューディールの芸術計画からも育っていった。グロートン・スクール

時代からローズヴェルト大統領の親友であったジョージ・ビドル(George Biddle)は、壁画家としての経験をふまえて1935年5月に大統領に宛てて手紙を書き、メキシコの壁画運動を参考にした芸術活動に対する公的援助を提言した。こうしたことも大きなきっかけとなり、失業救済の一環として、芸術家を保護する新しい計画が実行に移された。

まず1933年12月、民間事業局(Civil Works Administration)が専門的に芸術家を雇用する試みとして、公共芸術事業計画(Public Works of Art Project)がスタートした。この計画は、財務省のアドバイザーであったエドワード・ブルース(Edward Bruce)の指導・監督のもとに進められ、失業した美術家を雇用して、連邦政府の公共建造物に装飾を施すことを目的としていた。雇用された美術家には、1～6カ月の制作期間が与えられ、週30時間を単位に27ドルから38.25ドルの給料が支払われた。そのため民間事業局は、財源を財務省に割り当て、16地区を設定して美術家に仕事を与え、展覧会などを通じて市民のコミュニティ活動にも貢献した。³⁷⁾

次に、1934年10月には、財務省絵画・彫刻部の芸術家援助計画も、ブルースの立案によって始まった。これは、従来設計者・建築家が認める画家にしか許されなかった公共建造物の装飾を、無名の美術家にも公募によって門戸を開き、仕事の機会を与えようとするものであった。そのために、公共建造物を装飾するための情報が新聞広告などを通じて宣伝され、貧困生活に呻吟している無名の画家にも救済の手が差しのべられた。

また、1935年4月に制定された緊急救済支出法(Emergency Relief Appropriation Act)に基づき、翌5月には雇用促進局(Works Progress Administration)が設立され、最も規模の大きい連邦芸術計画(Federal Art Project)が開始された。雇用促進局の文化部門は、演劇・絵画・文学・音楽・歴史調査の5つに分かれていたが、絵画はこの中の第一プロジェクトであり、ホルジャー・ケイヒル(Holger Cahill)がその運営にあった。美術家は試験によって雇用され、定期的に作品を提出することを条件に給料が支払われた。この計画のピーク時には5,000人以上の芸術家が雇用されたと言われ、そのための財政支出も7,000万ドル近くに達し、南西部諸州を中心に107カ所のコミュニティ・アートセンターも建設された。全米各地の生活用品や文化遺産を収めた『アメリカ・デザイン目録』(Index of American Design)は、500人あまりの美術家を動員して編纂されたと言われ、連邦芸術計画の成果を示すシンボルである。³⁸⁾

さらに1935年7月には、雇用促進局が財務省に出資して、財務省救済芸術計画も実施された。これは、事業促進局と同じ雇用方法を取り、財務省絵画彫刻部が運営に当たったが、規模としては小さなものであった。

以上のような芸術計画は、財政規模や実施方法が異なり、参加した美術家の受け止め方にも、作品の制作様式にもかなり差が表れた。例えば、連邦芸術計画が作品の形式や内容に対して寛容であったのに対して、財務省絵画彫刻部の計画はカリカチュア化したものを禁止したため、参加した美術家のなかには不満をもつ人々もあった。しかしそれでも、巡回展覧会や文化・芸術講座を通じてコミュニティ活動そのものが地域的な広がりをもったことは間違いないし、各地の公共施設に描かれた4,000以上の壁画が、ニューディールの諸計画をアピールする“ヴィジュアル・

シンボル”として、多くの人々に受け入れられたことも確かであった。³⁹⁾

（２）芸術家組合

すでにジョン・リード・クラブに参加した芸術家のなかには、かなり早くから強い社会意識もっている人々もあったが、美術家が政府の芸術計画に関わり、コミュニティとの関係を深めるにつれて、雇用問題や社会参加のために彼ら自身の組織化も進んだ。⁴⁰⁾

1933年には、緊急労働局芸術家集団や失業芸術家集団などが、連邦緊急救済局長官のハリー・L・ホプキンス(Harry L. Hopkins)に美術家の救済を要求したため、公共芸術事業計画の実現に結び付いた。そして、このような芸術家グループの成果は芸術家行動委員会へと発展し、34年2月には芸術家組合(Artists' Union)が結成され、作品の制作スケジュールや報酬などについて政府の援助計画と交渉を行った。

芸術家組合は、ニューヨーク、ボルチモア、シカゴ、クリーヴランド、セントルイスなどでかなり組織的基盤を強化し、1935年7月にはアメリカ労働総同盟(American Federation of Labor : A F L)に組合としての加盟申請を行った。組合に参加した美術家たちは、苦情委員会などを中心に議論を重ね、政府の計画に不満があればピケをはったり、デモ行進に訴えたりする、激しい行動に出た。そのためニューヨーク市などでは、連邦芸術計画の市代表をしていたハロルド・スタイン(Harold Stein)が一晩中監禁されたり、援助資金の削減に反対する実力行動にでた200名余りの美術家が逮捕されるといった事件も起こった。しかし、ニューヨーク市長のフィオレロ・H・ラガーディア(Fiorello La Guardia)は、資金面で政府と交渉したり、独自に市美術館を開いたりして、美術家に援助の手を差し伸べた。⁴¹⁾

芸術家組合は、スチュアート・デーヴィス(Stuart Davis)、ジョセフ・ソルマン(Joseph Solman)、クラレンス・ワインストック(Clarlence Weinstock)らが中心になって『アート・フロント』(*Art Front*)を発行し、芸術と社会の関わりや芸術家の社会的責任などについて、アメリカばかりでなくヨーロッパの著名な芸術家の主張や論争を紹介した。また彼らは、1935年1月に連邦芸術法の成立を提唱し、芸術局を設立して恒久的な芸術援助の推進を政府に要求した。そして芸術家組合は、1937年1月にボルチモアで12名の全国代表者会議を開いて、産業別組織委員会(Committee for Industrial Organization : C I O)に加盟申請することを決定し、12月にそれが承認されたため、統一アメリカ芸術家組合と組織名を変更した。こうして芸術家組合は、労働組合のひとつとして雇用の安定とコミュニティとの関係強化を掲げ、芸術家の雇用を政府に要求していった。

しかし、芸術計画に雇用された美術家がかなり専門家に限られていたこともあって、芸術家組合は、より幅広い文化運動を推進するために、芸術家会議の開催を呼びかけた。デーヴィスによって起草されたこの呼びかけは、多くの社会問題と芸術活動の討議を求めており、シャーン、ルイス・マンフォード(Lewis Mumford)、ラファエル・ソイヤー(Raphael Soyer)、イサム・ノグチ(Isamu Noguchi)、デーヴィッド・スミス(David Smith)、マーガレット・バーク・ホワイト

(Margaret Bourke-White), ヤスオ・クニヨシ(Yasuo Kuniyoshi)など, 100名を越える著名な美術家が署名していた。⁴²⁾

(3) 芸術家会議

1936年2月, 第一回芸術家会議(Artists Congress)がニューヨークにおいて開かれた。芸術家組合は, 第一回芸術家会議を開催する前に周到な準備を行ったため, 会議は全体会も個々の部会もかなり民主的に運営された。2月14日の夜開かれた全体会は, 議長マンフォードの司会で討議が進み, デーヴィスが「なぜ芸術家会議か」と題する基調報告を行った。また翌日もたれた私的部会には, 10名のラテン・アメリカ諸国からの参加もあり, そのなかにはホセ・クレメンテ・オロスコ(José Clemente Orozco), デーヴィッド・シケイロス(David Alfaro Siqueiros), ルフィーノ・タマヨ(Rufino Tamayo)などメキシコ代表の姿も見られた。こうした部会活動の結果, 400名を越える参加者は, “平和, 民主主義, そして文化の発展”をスローガンに, この芸術家会議を恒久的なものに発展させることを決定した。さらに, 全体会の会費や組合費の増収によって, ニューヨークには常設の事務所が設置されることになり, 1937年12月に第二回芸術家会議が開かれる頃には, 700名まで会員数が増加した。⁴³⁾

第二回芸術家会議では, トーマス・マンが亡命先のスイスからメッセージを寄せ, フランコ政権の樹立されたスペインから, パブロ・ピカソ(Pablo Picasso)の国際電話も紹介された。そして第二回会議では, 恒久的な芸術政策を支える連邦芸術法が必要であること, 黒人やアジアの芸術家が受けている差別に反対すること, 労働組合運動と連帯して行くことなど, かなり政治的な問題の討議も進んだ。またこの頃になると, 各部会の活動成果として“世界民主主義の擁護”“アメリカ・ツデー”などの展覧会が開かれ, 戦争とファシズムをテーマにした作品も, アメリカ芸術連盟を通じて全国に巡回展示された。さらに第二回芸術家会議では, 1937年12月にピッツバーグで開かれた全米反戦反ファシズム連盟(American League against War and Fascism)の大会に代表を送り, その政治的立場を表明する展覧会を, ニューヨーク芸術家組合と協力して開いた。⁴⁴⁾

しかし, 1939年8月に独ソ不可侵条約が締結され, 11月にソ連がフィンランドに侵攻すると, すでに中立法の是非をめぐる議論が始まっていた芸術家の間に動揺と亀裂が深まった。前大統領のハーバート・フーヴァーが設立したフィンランド戦争救援委員会から, 展覧会などを通じた支援を芸術家会議は要請されたが, 全国執行委員会はそれを拒否した。しかもそこに, 芸術家会議と共産党の方針についての論議も重なってきたため, それまで会議の運営に重要な役割を果たしてきた人々の辞任が相次ぎ, デーヴィスも, 会議はもはや初期の目的を実現できないと主張して執行委員長を辞職した。⁴⁵⁾

4 知識人・文学者の衝撃と動揺

(1) スペイン内乱

1936年7月に軍部の蜂起に始まり, 1939年3月まで続いたスペイン内乱は, 知識人や文学者が

アメリカ「人民戦線」運動に立ち上がる格好の機会となった。共産党が1937年にエイブラハム・リンカーン大隊やジョージ・ワシントン大隊を組織すると、国際義勇軍に参加する知識人や文学者の姿も多く見られた。恐慌からいっこうに回復できないアメリカ社会の混乱した状況、ヨーロッパやアジアでますます危機的になりつつあるファシズム・軍国主義の台頭などを目の当りにして、多くのアメリカ知識人や文学者は、スペイン共和国の運命に自己の存在と責任をかけて行動を起こしたのであった。⁴⁶⁾

コミンテルン第七回大会によるアメリカ共産党の方針転換は、アール・ブラウダーの「共産主義は20世紀のアメリカニズムである」という主張にも表れているように、広範な反ファシズム・民主主義擁護の運動によって、「共産主義」をアメリカに土着化させることを目指した。グランヴィル・ヒックスは、アメリカの改革的・進歩的伝統を高く評価しながら、「共産主義」が個人主義を蔑ろにするものではなくて、むしろ個人の成長を保証する唯一の社会体制であると主張した。確かにアメリカの「人民戦線」運動は、ジョファークソンやリンカーンを高く評価しながら、反ファシズムを標榜する多くのフロント組織を生み出し、ファシズム反対と民主主義擁護の世論を盛り上げる社会運動に知識人や文学者をひきつけたのであった。⁴⁷⁾

（2）モスクワ裁判

しかしちょうどその頃、1936年から始まった「モスクワ裁判」の大粛正が文学者や知識人に激しい衝撃と動揺を与え、結果的に彼らの思想と行動を裁くことになった。

「モスクワ裁判」は、これまで革命運動と社会主義建設の功績者と見なしてきた指導者をファシストの“手先”・権力のスパイとして断罪したのであり、ソ連を「良心のモデル」と見てきた知識人や文学者に、個人の思想や行動の「自由」を尊重するのか、社会主義国家体制を維持・存続させる政治方針を優先するのか、その立場の選択を迫った。「モスクワ裁判」の正当性を主張したマルカム・カウリーでさえ、最初は「心臓が止まる思い」であったことをエドモンド・ウィルソンに伝え、決定的な証拠が出揃うまで判断を保留するという態度をとった。⁴⁸⁾

特に、1929年1月にソ連から国外追放されたレオン・トロツキー(Leon Trotsky)がはたして非難されたような罪を犯したのかどうかをめぐって、アメリカの知識人や文学者の意見は真二つに割れてしまい、彼らの政治的立場をめぐると対立はますます深まった。一方で、トロツキー擁護委員会(Trotsky Defense Committee)を組織したジョン・デューイを委員長とする「査問委員会」が、メキシコに亡命したトロツキーその他の被告を独自の調査に基づいて無罪と宣言すると、他方で、これに抗議する「モスクワ裁判」を支持する人々は、マルカム・カウリーやマーク・ブリッツシュタイン(Marc Blitzstein)を発起人とする声明を150名もの署名を集めて発表した。こうして、文学者・知識人の中の論争は、プロレタリア文学と社会主義のありかたをめぐる議論から、イデオロギイ的・党派的立場の露骨な対立に終始するようになってしまった。⁴⁹⁾

(3) 独ソ不可侵条約

しかも、1939年8月に独ソ不可侵条約が締結されると、ファシズムと闘うソ連と「社会主義」の大義に“夢”を託してきた知識人や文学者の間に、絶望感と虚脱感が覆いかぶさった。

デューイやシドニー・フック(Sidney Hook)は、独ソ不可侵条約が締結される2カ月前に反共・反ソの立場から「文化的自由のための委員会」(Committee for Cultural Freedom)を設立し、ドイツ・イタリア・スペイン・日本ばかりでなくソ連においても、自由な精神を脅かす全体主義が支配的になっていると訴えた。「文化的自由のための委員会」を支持した知識人や文学者は140名にも上り、その中には、これまで共産党・社会党の大統領候補に投票したり、ニューディール政策を批判したりしてきた者が多数含まれていた。⁵⁰⁾

これに対して、アメリカ共産党とソ連を擁護する知識人や文学者は、1939年8月14日に400名の署名を集めて公開状を発表し、ソ連社会主義と全体主義が同一であるというのはファシズムとその一味の見方であると反駁した。この公開状には、グランヴィル・ヒックス、ウィリアム・C・ウィリアムズ(William C. Williams)、F・O・マシーセン(F. O. Matthiessen)、ニュートン・アーヴィン(Newton Arvin)、マックス・ラーナー(Max Lerner)、フレデリック・L・シューマン(Frederick L. Schuman)、レオ・ヒューバーマン(Leo Huberman)などが署名していた。⁵¹⁾

しかし、公開状が発表された9日後に独ソ不可侵条約が締結されると、知識人や文学者たちには大混乱が起これ、ソ連がファシズム体制の国家になったと非難して分裂と転向が相次いだ。たとえば、グランヴィル・ヒックスは、『ニュー・リパブリック』誌に転向声明を発表して共産党から去って行ったし、独ソ不可侵条約をソ連外交の勝利と呼んだフレデリック・L・シューマンでさえ、内心動揺を隠しきれずに虚脱感にさいなまれ続けた。

さらに、1939年11月にソ連がフィンランドに侵攻すると、知識人や文学者たちがソ連社会主義に託した“夢”は無残にも崩れ去った。フレデリック・L・シューマンは、ソ連の防衛という現実的な外交方針をスターリンが独ソ不可侵条約によって実行に移したとそれまで評価していたが、ソ連がフィンランドへ侵攻するに及んで、これは枢軸諸国の侵略と同じであると反ソの立場に転向してしまった。こうして、独ソ不可侵条約の締結からソ連のフィンランド侵攻という事態を前にして、多くの文学者や知識人は、あまりの絶望感や虚脱感から社会的な“夢”を放棄して組織的な社会行動から離れていったり、社会意識を次第に沈静化させて精神世界に閉じこもったりする傾向を強めた。⁵²⁾

むすびにかえて—マッカーシズムと冷戦の渦中へ—

それでも、『ニュー・マッシュズ』誌は、38年5月に「モスクワ裁判」の正当性を主張する声明を発表し、39年6月には第三回全米作家会議も開かれた。しかし、文学者や知識人が独ソ不可侵条約から受けた衝撃はあまりにも大きく、アメリカ作家連盟の役員の3分の1は辞職し、800名の会員のうち多くの人々が連盟から脱退した。これを契機に、多くの文学者や知識人は、次々と社会的な“夢”を放棄して自らの「世界」に閉じこもり、良心の呵責と絶望感に悩まされ続けた。⁵³⁾

一方では、1937年の初頭から議会内部で保守派勢力の台頭が顕著になり、8月から急激な景気後退、いわゆる“ローズヴェルト不況”が始まると、反ニューディールの保守的なムードが支配的になり、翌年5月には下院非米活動調査特別委員会(House Committee on Un-American Activities)も設置された。下院非米活動調査特別委員会は、当初ナチス支持集団の破壊活動を防止する目的で設けられたが、次第にその矛先はニューディール派の政治家や官僚にまで及び、“反共ヒステリー”のマッカーシズムの時代を迎えた。文学者や知識人たちは、こうした事態を前にしてインテリとしての知性や精神をますます揺さぶられ、自らの過去を悔いて「転向」の姿勢を明らかにする者も多く現れた。その結果、深刻化する恐慌のなかで抱いた彼らの“夢”や希望は失われ、やがて冷戦という硬直化したイデオロギーの時代に呑みこまれてしまった。⁵⁴⁾

(付記) カナダ・合衆国・中南米の研究者は、コロンブスのアメリカ「発見」500年を記念して、1993年に『南北アメリカの500年』(全5巻、青木書店)という共同研究の成果を発表した。私自身も、第4巻の「危機と改革」という標題に沿って、小論「大恐慌期米国の民衆と文化——文学者・知識人・美術家の社会意識——」を寄稿した。本稿は、この拙論を敷衍して書き直し、出典なども明確にさせて再提出するものである。

注

- 1) 常松洋『大衆消費社会の登場』(山川出版社、1997年)参照。
- 2) ジョン・リード(John Reed)が1919年に『世界をゆるがした十日間』を著して以来、多くのアメリカ知識人がソ連を訪れて、人類の夢と社会の未来をそこに見た。そのなかには、プラグマティズムの哲学者ジョン・デューイ(John Dewey)をはじめとして、経済学者のレックスフォード・G・タグウェル(Rexford G. Tugwell), 社会事業家のハリー・ホプキンズ(Harry Hopkins), 哲学者のホラス・カレン(Horace Kallen)などのニュー・ディール派も多く見られた。Stuart Chase, Robert Dunn, and R. G. Tugwell, eds., *Soviet Russia in the Second Decade* (New York: Viking Press 1928); John Dewey, *Impressions of Soviet Russia* (New York: International Publishers, 1929); R. G. Tugwell, "Experimental Control in Russian Industry," *Political Science Quarterly* (June 1928); Lincoln Steffens, "Stop, Look, Listen!" *Survey Graphic* (March 1927); Editorial, "Are Artists People," *New Masses*, II (January 1927), p. 7.
- 3) たとえば、『戦艦ポチョムキン』などが代表的なものである。James Burkhart Gilbert, *Writers and Partisans: A History of Literary Radicalism in America* (New York: Columbia University Press, 1968), p. 85(大津栄一郎訳『作家と党派——アメリカにおける文学的ラディカリズムの歴史——』, 研究社, 1974年, 87頁)。
- 4) Malcolm Cowley, *Exile's Return* (New York: The Viking Press, 1965); John Chamberlain, *Farewell to Reform* (New York: The John Company, 1932).
- 5) サッコ・バンゼッティ事件の両被告が処刑されたことに、知識人や文学者は激しい衝撃を受けた。そして、この1927年には多くの知識人や文学者が訪ソした。Louis G. Joughin and Edmund M. Morgan, *The Legacy of Sacco and Vanzetti* (New York: Harcourt, Brace, 1948); Isabel Leighton, ed., *The Aspirin Age, 1919-1941* (New York: Simon and Schuster Publishers, 1949), p. 169; John Dos

- Passos, "They Are Dead Now," *New Masses* (October 1927); Malcolm Cowley, "Echoes of a Crime," *New Republic* (Aug. 28, 1935); Edmund Wilson, "The Consequences of the Crash," *Shores of Light* (Sept. 21, 1935); Murray Kempton, *Part of Our Time: Some Ruins and Monuments of the Thirties* (New York: Simon and Schuster Publishers, 1955), pp. 45-50; John Dos Passos, *The Big Money* (New York: Harcourt, Brace, 1936), p. 462. しかも、ドス・パソスやマルカム・カウリーのように、「社会主義」と「共産主義」を明確に区別して、「共産主義」への期待を表明する知識人や文学者が現れたことに注目すべきである。Theodore Dreiser, "Where We Stand," *International Literature* (July 1934), p. 80.
- 6) "An Open Letter to American Intellectuals," *Modern Monthly* (March 1934); "Social Control vs. the Constitution," *New Republic* (June 12, 1935); John Dos Passos, "Preface Twenty-Five Years Later," *First Encounter* (New York: Philosophical Library, 1945), p. 9.
- 7) Michael Gold, "Toward Proletarian Art," *Liberator*, IV (February 1921), pp. 21-24; Granville Hicks, *Where We Came Out* (New York: Viking Press, 1954), p. 25; Michael Gold, "Three Schools of U.S. Writings," *New Masses*, IV (September 1928), p. 13; Michael Gold, "Notes on the Month," *New Masses* (March 1928).
- 8) Max Bedacht, "The Major Problem Before the Seventh Convention of the C. P. U. S. A.," *The Communist*, IX (June 1930); Irving Howe and Lewis Coser, *The American Communist Party: A Critical History* (New York: Da Capo Press, 1974), pp. 175-235 (西田勲・井上 乾一訳『アメリカ共産主義運動史』中, 国書刊行会, 1979年, 3-83頁)。Michael Gold, "Wilder: Prophet of the Genteel Christ," *New Republic* (Oct. 22, 1930); Stanley J. Kunitz and Howard Haycraft, *Twentieth Century Authors* (New York: H.H. Wilson, 1942), p. 547; Norman Forester, ed., *Humanism and America* (New York: Farrar & Rinehart, 1930), pp. 39-42; Edmund Wilson, *Shores of Light* (New York: Straus & Young, 1952), p. 589; Edmund Wilson, "Notes on Babbitt and More," *New Republic*, L XII (March 19, 1930); James B. Gilbert, *op. cit.*, p. 89 (邦訳前掲書, 90頁)。樋口秀雄「アメリカ1930年代におけるいわゆる『文学戦争』について」(1)『英語英文学研究』第6号(1973年8月)。
- 9) Michael Gold, "Proletarian Realism," *New Masses* (Sept. 1930); Max Eastman, *Artists in Uniform* (New York: Alfred A. Knopp, 1934); Edwin Seaver, "What Is A Proletarian Novel, Notes Toward A Definition," *Partisan Review* (April-May 1935)。樋口秀雄, 同上 論文(1)。
- 10) Alan Calmer, "All Quiet on the Literary Front," *Partisan Review and Anvil* (March 6, 1936); Wallace Phelps and Philip Rahv, "Problems and Perspective in Revolutionary Literature," *Partisan Review* (June-July 1934); James B. Gilbert, *ibid.*, ch. 4 (邦訳同上書, 第4章)。
- 11) Walter B. Rideout, *The Radical Novel in the United States, 1900-1954* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1956), p. 141; Orrick Johns, "The John Reed Clubs Meet," *New Masses* (Feb. 26, 1935); Eric Homberger, *American Writers and Radical Politics, 1900-39* (New York: St. Martin's Press, 1986), ch. 5; James B. Gilbert, *ibid.*, pp. 91-92, 104-105, 107-109 (邦訳同上書, 92, 103-104, 106-107頁)。Michael Gold, "Notes from Kharkov," *New Masses* (March 4, 1931)。樋口秀雄「30年代におけるアメリカ知識人の動向——ラップの解散とジョン・リード・クラブの解散——」同志社大学人文科学研究所編『社会科学』第17号(1974年3月)。
- 12) ジョン・リード・クラブは, "ブルジョア文化"と"プロレタリア文化"を区別する「二元主義」をとっており, 結果的には厳格な思想統制をもたらして孤立化を深めた。Alan Calmer, "What's Doing in the John Reed Clubs of the U.S.," *Daily Worker* (April 18, 1934), p. 5; Alan Calmer, "Report on Regional Conference of the John Reed Clubs of the East held on Saturday, July 29, 1933," in Box 153, *Joseph Freeman Papers*, Hoover Institution, Stanford University。なおハリコフ会議には, ジョン・リード・クラブの代表6名が参加した。
- 13) なお, このジョン・リード・クラブ全国代表者会議の組織委員会は, マルカム・カウリー, ヘンリ

- ー・ハート(Henry Hart), マイケル・ブラン克福ォート(Michael Blankfort), エドウィン・シーヴァー(Edwin Seaver)などが中心メンバーである。
- 14) John Gates, *The Story of An American Communist* (New York:International Publishers, 1958), pp. 18-19; William Z. Foster, *Toward Soviet America* (New York:International Publishers, 1932), p. 284; Eral Browder, *Report of the Central Committee to the Eighth Convention of the Communist Party of America* (New York: International Publishers, 1934), pp. 20-21; Eral Browder, *Communism in the United States* (New York: International Publishers, 1935), pp. 14, 115; Harold M. Ware and Webster Powell, "Palnning for Permanent Poverty," *Harper's* (April 1935); Archibald MacLeish, "Preface to American Manifesto," *Forum* (April 1934); John T. Flynn, "To Get Rich Scare the Rich," *New Republic* (Sept. 9, 1936). Cf. American Federation of Labor, *Proceedings of the Fifty-Fifth Annual Convention* (Washington, 1936), pp. 746-747; House Labor Committee, *Unemployment, Old-Age and Social Insurance: Hearings*, 74 Cong., 1 Sess (1935).
- 15) James B. Gilbert, *op. cit.*, pp. 131,134(邦訳前掲書, 129~130, 132~133頁)。William Philips, "What Happened in the 30's," *Commentary*, X X XIV (September 1962), p. 205; Editorial, "Forward to the Great Alliance," *Partisan Review*, II(April-May 1935), p. 3; Editorial, "The Kharkov Conference of Revolutionary Writers," *New Masses* (January 1931)樋口秀雄「アメリカ1930年代における『文学戦争』について」(2)『英語英文学研究』第10号(1975年3月)。なお、ジョン・リード・クラブの解散について、リチャード・ライト(Richard Wright)やレオン・デンネン(Leon Dennen)などはあくまで反対した。
- 16) Henry Hart, ed., *American Writers' Congress* (New York: International Publishers, 1935), pp. 10-11; Lionel Trilling, "Politics and the Liberal," *Nation* (July 4, 1934); W. B. Rideout, *The Radical Novel in the United States, 1900-1954* (Cambridge: Cambridge University Press, 1956), p. 171; Philip Rahv, "Proletarian Literature: A Political Autopsy," *Southern Review* (Winter 1939); Murray Kempton, *op. cit.*, ch. 4; Eugene Lyons, *The Red Decade: The Stalinist Penetration of America* (Indianapolis : Bobbs-Merrill Publishers, 1949), ch. 12; Granville Hicks, "Writers in the Thirties," in *As We Saw the Thirties: Essays on Social and Political Movements of a Decade* ed. by Rita James Simon (Urbana: University of Illinois Press, 1967); Granville Hicks, "Communism and the American Writer," *Newberry Library Bulletin* (Aug. 1959). W. D. ライドアウトは, 1932年には11, 1933・34年には28のプロレタリア小説が現れたと推定している。
- 17) John Strachey, *The Coming Struggle for Power* (New York: International Publishers, 1935); Daniel Bell, "The Background and Development of Marxian Socialism in the United States," in Donald D. Egbert and Stow Persons, eds., *Socialism and American Life* (Princeton: Princeton University Press, 1952), ch. 10; Waldo Frank, "Forward," in Henry Hart ed., *American Writers' Congress* (New York:International Publishers, 1935); Eral Browder, *Communism in the United States* (New York: International Publishers, 1935), pp. 167-168; Granville Hicks, "Communism and the American Intellectuals," in I. D. Talmadge, ed., *Whose Revolution?* (New York: Harper & Row Publishers, 1953), p. 94; W. P. Mangold, "Forming a People's Front," *New Republic* (Jan. 22, 1936); Cf. Philip Rahv, "Two Years of Progress—From Waldo Frank to Donald Ogden Stewart," *Partisan Review*, IV(February 1938), pp. 23-24.
- 18) Kenneth Burke, "Discussion and Proceedings," in Henry Hart ed., *op. cit.*, p. 170; Kenneth Burke, "The Nature of Art under Capitalism," *Nation* (Dec. 13, 1933); Granville Hicks, *Part of the Truth* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1965), p. 129; Mathew Josephson, *Infidel in the Temple, A Memoir of the Nineteen-Thirties* (New York: Alfred A. Knoph, 1967), pp. 358-359; Eral Browder, *What is Communism?* (New York: The Vanguard Press, 1936), p. 19.

- 19) Eric Homberger, *American Writers and Radical Politics, 1900-39: Equivocal Commitments* (New York: St. Martin's Press, 1986). Cf. Nathaniel Weyl, "The Khaki Shirts," *New Republic* (Sept. 21, 1932); Editorial, "Murder and the Khaki Shirts," *Nation* (Nov. 20, 1933); Norman Thomas, *The Choice before Us* (New York: Harper & Row Publishers, 1934), p. 192; S. D. McCoy, "Hitlerism Invades America," *Today* (April 7, 1934); Arthur Graham, "Crazy Like a Fox," *New Republic* (April 18, 1934); Jean Burton, "The Shirts," *Modern Monthly* (Feb. 18, 1933); Allan Calmer, "New Period in American Leftwing Literature," *International Literature* (July 1935); Kenneth Burk, "The Nature of Art under Capitalism," *Nation* (Dec. 13, 1933). なお、1966年の夏、第一回全米作家会議を回顧するシンポジウムが『アメリカン・スカラー』(*American Scholar*)誌上でおこなわれた。"Symposium: Thirty Years Later, Memories of the First American Writers' Congress," *American Scholar* (Summer 1966).
- 20) Earl Browder, "Struggle for a United Front," *The Communist*, XVIII(October 1934); Georgi Dimitroff, "The Threat of Fascism in the United States," *The Communist*, XIV (October 1935); Michael Gold, "Notes on the Cultural Front," *New Masses*, XXV(December 1937), p. 4; Earl Browder, *The People's Front* (New York: International Publishers, 1938); Irving Howe and Lewis Coser, *op. cit.*, pp. 230-235(邦訳前掲書, 73-79頁)。James B. Gilbert, *op. cit.*, p. 55(邦訳前掲書, 58頁)。
- 21) Philip Rahv, "The Revolutionary Consciousness," *Nation*, CXIV(April 10, 1937), p. 4 12; Henry Hart, ed., *The Writers in a Changing World* (New York: Equinox Cooperative Press, 1937), pp. 225-235; Granville Hicks, "The Crisis in Criticism," *New Masses* (January 1933).
- 22) Henry Hart, *American Writers Congress* (New York: International Publishers, 1935), pp. 78-87; Irving Howe and Lewis Coser, *op. cit.*, p. 158(邦訳前掲書, 214頁)。
- 23) James B. Gilbert, *op. cit.*, pp. 159-160(邦訳前掲書, 157-158頁)。
- 24) Sidney Hook, "The Future of Socialism," *Partisan Review*, XIV(January-February 1947), p. 54; Van Wyck Brooks, *From the Shadow of the Mountain* (New York: E.P. Dutton, 1961), p. 85.
- 25) George Novack, "The Intellectuals and the Crisis," *New International*, III(June 1936); William Troy and William Carlos Williams, "What is Americanism?" *Partisan Review and Anvil*, III(April 1936); Horace Gregory, ed., *New Letters in America* (New York: W.W. Norton, 1937), p. 178.
- 26) Philip Rahv, "Two Years of Progress," *Partisan Review*, IV(February 1938), p. 24; James B. Gilbert, *op. cit.*, pp. 224-225(邦訳前掲書, 220-221頁)。Granville Hicks, "Communism and the American Intellectuals," Irving Dewitt Talmadge, ed., *Whose Revolution?* (New York: Howell Soskin, 1941), p. 96.
- 27) John Chamberlain, "A Hamiltonian Reformer," *New Republic* (Sept. 14, 1932); Raymond Moley, *After Seven Years*, p. 64. Cf. *Proceedings of the Democratic National Committee*, p. 597; Alfred Lief, *Democracy's Norris: The Biography of a Lonely Crusade* (New York: Stackpole Press, 1939), pp. 388-394; Harold L. Ikes, *Autobiography of a Curmudgeon* (New York: Reynal & Hitchcock Press, 1943), p. 253; A. F. Mullen, *Western Democrat* (New York: Harper & Row Publishers, 1940), pp. 294-295; Donald Richberg, *My Hero: The Indiscreet Memoirs of an Eventful but Unheroic Life* (New York: Putnam Publishers, 1954), pp. 156-157.
- 28) Paul Douglas, "Who Are the Democrats?" *World Tomorrow* (Sept. 28, 1932); John Dewey, "The Need for a New Party," *New Republic* (March 18, 1931); John Dewey, "Prospects for a Third Party," *New Republic* (July 27, 1932); R. M. Lovett, "Progressives at Cleveland," *New Republic* (July 20, 1932); *New York Times* (Oct 7, 1932). その他、トーマスを支持した知識人には、エルマー・デーヴィス(Elmer Davis), ヘンリー・ハズリット(Henry Hazlitt), ウィリアム・T・フォスター(William T. Foster), スチュアート・チェース(Stuart Chase), ジョージ・S・カウフマン(George S. Kaufman),

- ステイファン・V・ベネー(Stephen V. Benet), モーリス・アーント(Morris Ernst), ラインホルド・ニーバー(Reinhold Niebuhr)などがあげられる。なお、独立政治行動連盟の機関誌は『コモンセンス』(*Common Sense*)である。
- 29) Lewis Mumford, "How I Shall Vote," *Forum* (Nov. 1932); *Culture and Crisis* (New York, 1932). この声明には、セオドア・ドライサー(Theodore Dreiser), ジョン・ドス・パソス(John Dos Passos), シャーウッド・アンダーソン(Sherwood Anderson), アースキン・コールドウェル(Erskin Caldwell), ウォルドー・フランク(Waldo Frank), エドモンド・ウィルソン(Edmund Wilson), ニュートン・アーヴィン(Newton Arvin), マルコム・カウリー(Malcolm Cowley), グランヴィル・ヒックス(Granville Hicks), マシュー・ジョセフソン(Matthew Josephson), シドニー・フック(Sidney Hook), フレデリック・L・シューマン(Frederik L. Shuman), リンカン・ステフェンズ(Lincoln Steffens), エラ・ウィンター(Ella Winter)などの知識人が署名していた。
- 30) *New York Times* (Feb. 17, 1934); "An Open Letter," *New Masses* (March 6, 1934); Editorial, "To John Dos Passos," *New Masses* (March 6, 1934). この抗議文は『ニュー・マッシズ』誌に掲載されたが、編集者側は共産党を弁護し、ドス・パソスなどの姿勢を批判した。このマディソン・スクエア・ガーデン事件の後、①共産党の姿勢を批判して「転向」していく知識人、②「転向」していく人々を「裏切り者」と攻撃する知識人、③両者ほどの明確な姿勢や立場を表明できずに動揺する知識人などに分かれていく傾向が表れる。Cf. Editorial, "Full Stenographic Report of the Declaration of Principles Adapted at the National Convention," *American Socialist Quarterly*, supp., (July 1934); John Herling, "The Socialist Convention," *New Republic* (June 20, 1934); Norman Thomas, *A Socialist Looks at the New Deal* (New York: International Publishers, 1933); Norman Thomas, "On Our Way," *Saturday Review of Literature* (April 14, 1934).
- 31) 1930年代の後半になると、共産党と社会党は対照的な方針をとるようになる。D. P. Berenberg, "Pie in the Sky," *American Socialist Quarterly* (March 1935); Norman Thomas, "The Campaign of 1934," *American Socialist Quarterly* (Autumn 1934); Eunice Clark, "The Failure of the Socialist Party," *Common Sense* (Oct. 1934); *New York Times* (Feb. 1935); W. P. Mangold, "The Communist Convention," *New Republic* (July 15, 1936); Irving Howe and Lewis Coser, *op. cit.*, pp.319-386 (邦訳前掲書, 229-317頁)。Jack Stachel, "Pure Trade Union Policy," *The Communist* (November 1934); New York States CP., *Proceedings, Tenth Convention*, 1938; Alexander Bittleman, "Review of the Month," *The Communist* (April 1936).
- 32) Fred E. Beal, *Proletarian Journey* (New York: Putnam Publishers, 1937); Margaret Karkin, "Ella May's Songs," *Nation* (Oct. 9, 1929); Paul Blanshard, "Communism in Southern Textile Mills," *Nation* (April 24, 1929); Irving Howe and Lewis Coser, *ibid.*, pp.257-262(邦訳同上書, 115-123頁)。
- 33) Irving Howe and Lewis Coser, *ibid.*, pp.263-266(邦訳同上書, 123-127頁)。Eric Homberger, *op. cit.*, pp. 141-162.
- 34) 拙稿「アメリカ共産党と黒人問題——スッコツボロー事件の場合——」『西洋史学』第135号(1984年12月)。
- 35) 以下の文献や資料が参考になる。桑原住雄『アメリカ絵画の系譜』(美術出版社, 1978年)。石崎浩一郎『アメリカン・アート』(講談社, 1980年)。村木明『アメリカ近代美術の展開』(美術公論社, 1976年)。A. A. デヴィッドソン, 桑原住雄・桑原美知世訳『アメリカ美術の歴史』(パルコ出版, 1979年)。Barbara Rose, *American Art since 1900: A Critical History* (New York: Frederick A. Praeger Inc., 1967)(桑原住雄訳『二十世紀アメリカ美術』, 美術出版社, 1970年, 121頁)。サラ・ハッチンソン, 森本清水訳『ニューディールの美術』『T R E N D』1980年10月号。
- 36) Bernarda Bryson Shahn, *Ben Shahn* (New York: Harry A. Abrams, Inc., 1986). 拙稿「1930年代のベン・シャーン」『北陸歴科研会報』第18号(1983年11月)。拙稿「ベン・シャーン(1)——『社会派』美

術家の軌跡・ニューディール期——』『北陸史学』第37号（1988年11月）。

- 37) Francis V. O'Connor, *Federal Art Patronage, 1933-43* (College Park, Md.: University of Maryland Press, 1966); *The New Deal Art Projects: An Anthology of Memoirs* (Washington D.C.: Smithsonian Institution Press, 1972).
- 38) Francis V. O'Connor, ed., *Art for the Millions: Essays from the 1930's by Artists and Administrators of the WPA Federal Art Project* (Greenwich, Conn: New York Graphic, 1973).
- 39) 拙稿「ニュー・ディールの美術行政とアメリカ美術」『桐朋学園大学研究紀要』第8集（1982年7月）。Francis V. O'Connor, *ibid.*, pp. 31-42.
- 40) James B. Gilbert, *op. cit.*, pp. 107-108(邦訳前掲書, 107頁)。Rosalind Bengelsdorf Browne, "The American Abstract Artists and the WPA Federal Art Project," in Francis V. O'Connor, ed., *ibid.*, pp. 223-245.
- 41) このような具体的な行動については以下を参照。Francis V. O'Connor, *ibid.*, pp. 45-48; Gerald M. Monroe, "The Artists Union of New York." Unpublished Ph.D. dissertation, New York University, (1971).
- 42) こうした点については、注37と注38にあげたフランシス・V・オコンナーの3部作が詳細に検討を加えているので参照されたい。
- 43) Lincoln Rothchild, "Artists' Organizations of the Depression Decade," in Francis V. O'Connor, *ibid.*, pp. 198-222.加藤薫『メキシコ壁画運動——リベラ, オロスコ, シケイロス——』（平凡社, 1988年）。
- 44) Gerald M. Monroe, *op. cit.*, pp. 46-78.次第にこの頃になると、戦争か平和か、ファシズムか民主主義かといった政治主義的な議論に終始するようになる。
- 45) Cf. Frances K. Pohl, *Ben Shahn: New Deal Artist in a Cold War Climate, 1947-1954* (Austin: University of Texas Press, 1989); Donald Drew Egbert, "Socialism and American Art," in Donald Drew Egbert and Stow Persons, eds., *Socialism and American Life* Vol. 1 (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1952).
- 46) North American Committee to Aid Spanish Democracy, *Plans and Results* (August 23, 1937); Eugene Lyons, *The Red Decade* (New York: Viking Press, 1937), p. 282.
- 47) Irving Howe and Lewis Coser, *op. cit.*, p. 339(邦訳前掲書, 256頁)。Carl Reeve, "Benjamin Franklin—Champion of Democracy?" *The Communist* (July 1939); Eral Browder, "Perspectives of the 1940 Election," *The Communist* (June 1939). 1938年10月の『デーリ・ワーカー』紙は、際立った特徴を示している。
- 48) James B. Gilbert, *op. cit.*, p. 157(邦訳前掲書, 155頁)。
- 49) Irving Howe and Lewis Coser, *op. cit.*, pp. 300-301(邦訳前掲書, 194頁)。James B. Gilbert, *op. cit.*, p. 166-168(邦訳前掲書, 164-165頁)。Dwight Macdonald, "The Communist Party," *Fortune*, X (September 1934), p. 69; Michael Gold, "Notes on the Cultural Front," *New Masses*, XXV (December 7, 1937), p. 2; Dwight Macdonald, "Letter to the Editor," *Nation*, CXLIV (June 19, 1937), p. 714。「モスクワ裁判」の支持声明に署名した知識人や文学者の中には、作家のセオドア・ドライサー、社会学者のマックス・ラーナー (Max Lerner), 哲学者のハワード・セルサム (Howard Seldsam), 劇作家のリリアン・マッカーシー (Lilian McCarthy) などいた。なお、当時の知識人や文学者の間では、トロツキー擁護を表明する人々は少数派であり、そうした人々には様々な圧迫が加えられた。
- 50) "Manifesto," *Partisan Review*, VI (Fall 1939), pp. 125-126; John Dewey, "Letter to the Editor," *New Republic*, XCIV (June 14, 1939), pp. 161-162.斎藤治子『独ソ不可侵条約——ソ連外交秘史——』（新樹社, 1995年）。
- 51) Michael Gold, "What Side Are You on," *New Masses*, XXI (October 3, 1939); Albert Maltz, "What

- Shall We Ask of Writers?" *New Masses*, XXX(December 12, 1946).
- 52) Edmund Wilson, *Travels in Two Democracies* (New York: Harcourt,Brace, 1936), p. 321; Malcolm Cowley, "Red Ivory Tower," *New Republic*, XCVII(November 9, 1938), p.22; James B. Gilbert, *op. cit.*, pp. 101-102,224(邦訳前掲書, 101, 221頁)。
- 53) James B. Gilbert, *op. cit.*, pp. 95,225(邦訳前掲書, 95, 222頁)。Irving Howe and Lewis Coser, *op. cit.*, pp. 315(邦訳前掲書, 217-218頁)。Michael Gold, "Untitled Address to the League of American Writers," (June 6-8, 1941)p. 4; Malcolm Cowley, "Exiled Writers Issue," *Saturday Review of Literature*, XXII(October 19, 1940); E. A. Schachner, "Revolutionary Literature in the United States Today," *Windsor Quarterly*, II(Spring 1934), p. 28.
- 54) Clement Greenberg and Dwight Macdonald, "Ten Propositions," *Partisan Review*, XIV (July-August 1941), p. 278; William Philips and Philip Rahv, "The Future of Socialism," *Partisan Review*, XIV(January-February 1947), pp. 23-24.前川玲子「1930年代とアメリカ知識人の挫折——ラディカル・ヴィジョンの崩壊——」『アメリカ研究』第24号 (1990年)。Cf.本間長世「30年代とアメリカ知識人」『理念の共和国』（中央公論社, 1976年）。なお、『パーティザン・レビュー』誌は, 1947年に「社会主義の未来」をテーマにしたシンポジウムを開いている。日本では権力による強制が知識人の「転向」を生み出したが, アメリカでは1930年代に知識人がそのような強制力を受けなかっただけに, 余計に彼らの心をさいなみ, 彼らを絶望の淵に突き落としたとも言えるであろう。

(付記) 本稿は, 本学に申請した特別研究「1930年代のアメリカ合衆国(大恐慌の時代)における民衆と文化に関する包括的研究」に基づいて行なった研究成果の一部である。